

## 4 思いは見えないけれど…

ぼくとたかお君は、野球少年団でピッチャーとキャッチャーをやっている。たかお君がピッチャー、ぼくがキャッチャー。息の合うコンビだと監督もみとめてくれている。

ところで、ぼくのクラスには外国からの転校生がいた。名前はガブリエル君という。やって来た直後、クラスのみんなはガブリエル君のところにも行かず、近づくこともなかった。

転校してきて一か月。ガブリエル君はまだ日本語がよく分からないと見えて、休み時間は一人で過ごすことが多くなっていた。そのことが、ぼくはとても気になっていた。

二年前、ぼくも転校してきた。はじめのこ





ろ、なかなか遊びの輪に入れないで一人ぼっちになり、休み時間などなければいいと思っていた。

そんな時、やさしく声をかけてくれたのが、たかお君だった。それから、たかお君との友情が始まった。

「今日の昼休みもキャッチボールやろうかな。」

「うん、いいよ。」

チボールをする約束をした。

そして、その昼休みのこと。外に行こうとした時、日本語の本から目を見て、深いため息をつくガブリエル君のすがたが目に入った。

「いっしょにキャッチボールしようよ。」

と、ガブリエル君に声をかけようと思った。しかし、足はすくみ、声もうまく出せない。心ぞうがドキン、ドキンと音を立てて動いている。

(どうしよう)

その時、いつも目になっている校長室前の詩が思い出された。ぼくたちの学校の校歌をつくった宮澤章二さんの「行為の意味」だ。それはぼくが大好きな詩だ。

確かに「へこころ」はだれにも見えない  
けれど「へこころづかい」は見えるのだ  
それは 人に対する積極的な行為だから  
同じように胸の中の「思い」は見えない  
けれど「思いやり」はだれにでも見える  
それも人に対する積極的な行為なのだから

（こころは見えないけれど、心づかいは見える。思いは見えないけれど、思いやりはだれにでも見える）

「ぼくは、ガブリエル君の前に立ち、目をつぶって、  
「いっしょにキャッチボールしようよ。」  
と、大きな声で言った。」

ガブリエル君はにこっと笑い、手を差し出しながら、  
「ありがとう。」  
と、言った。

ガブリエル君の投げたボールは、  
ぼくのミットに音をたてておさまった。  
それは今までになく、心地よい手の感じだった。



〈参考文献〉  
行為の意味（青春前  
期のきみたちに）  
宮澤章二著  
ごま書房新社